研究ノート

自然災害から文化財をまもる

― 台風・地震による文化財被害 ―

西山　要一*
Yoichi Nishiyama

1　1998年台風7号による奈良の文化財被害

昨1998年12月、奈良では、東大寺や平城宮跡などの文化財がユネスコ世界遺産に登録された。国宝・重要文化財の集中する奈良は、世界遺産に最もふさわしい地の一つであることは誰もが認める所である。これに先立つ2カ月前の9月22日の台風7号による文化財の被災は、世界遺産登録を12月にひかえていただけに衝撃的であったが、災害から文化財をまもり、未来に伝えることの意義や大切さを考える良き機会をも提供した。

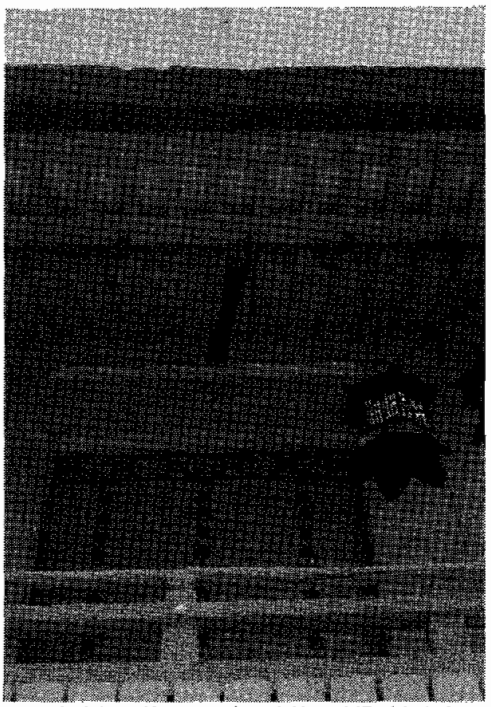
9月22日に近畿地方を縦断した台風7号は、近畿6府県の国・府県指定文化財に多大の被害をもたらした。9月末までの近畿各府県教育委員会の集計によると、奈良県117件、大阪府48件、兵庫県13件、京都府44件、滋賀県39件、和歌山県19件のあわせ280件の被害が報告されているが、天然記念物や石造物群の被害、また、市町村指定文化財や未指定ではあるが貴重である文化財を含めると膨大な被害数であったと想定される。

奈良県では、奈良市の春日大社・霊山寺・薬師寺、天理市の石上神社、桜井市の長谷寺、斑鳩町の法隆寺、当麻町の当麻寺、広陵町の百済寺、室生村の室生寺、吉野町の金峯山寺などの89件の建造物屋根や壁に被害があった。これらは国県指定建造物件数の25%、棟数の17%にあたる。他に栄山寺石灯篭など美術工芸品の被害4件、吉野山の桜、玉置山の杉、春日山原生林などの樹木の倒れたものなど史跡・名勝・天然記念物の被害は15件などである。

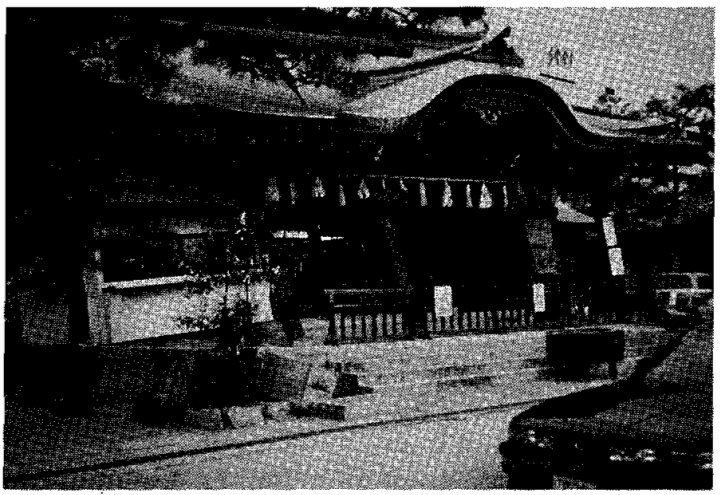
被害の主原因は予想をはるかに超えた強風にあるが、強風の直接的破壊より倒木による間接的破壊がより大きかった。奈良地方気象台は、台風7号の中心が大阪府から奈良県北西部を通り滋賀県にあった午後3時すぎに最大瞬間風速37.6メートル／秒の南南西の暴風を記録している。室生寺では、西側の谷筋を駆け上がった強風が更に風速・風力を増して樹齢数百年の杉の大木を根こそぎなぎ倒して五重塔の屋根と相輪を破壊し、奥の院御影堂は僅か数メートルの差で難を逃れた。春日山原生林でも西からの暴風により数えきれない数の杉が倒され、春日大社では、杉の倒木が東回廊の屋根を直撃破壊した。杉はもともと根が浅いうえに、岩盤上のごく薄い土壌に根を張っているといわれるが、近年の酸性雨や大気汚染による樹勢の衰退とも無関

平成11年9月10日原稿受理　*文学部文化財学科

1998年台風７号による室生寺五重塔の破損（奈良県室生村、強風による倒木が塔屋根を破損）



1998年台風７号による春日大社の破損（奈良市、強風により落下した樹枝が桧皮屋根を貫いた）



1995年兵庫県南部地震により傾いた元住吉神社拝殿（神戸市東灘区）

係ではないだろう。

2　1995年１月兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の文化財被害と救援

1995年１月17日午前５時46分に発生した兵庫県南部地震の激震の恐怖は、悩中の記憶に止まらず、肉体の記憶となって今も鮮かに蘇ってくる。マグニチュード7.2、最大震度７の淡路島北部から神戸・大阪に至る激震地の膨大な人的・物的被害は今も計り知れない。

文化財の被害も例外ではない。西は島根・香川から東は愛知・三重にいたる国・府県・市町村の建造物・美術工芸品・民俗文化財・史跡等の指定文化財の被害は340件以上、未指定の貴重な文化財の被害は5,000件とも10,000件とも言われる。

震度４を記録した奈良県でも、璉城寺阿弥陀如来像台座や、法隆寺聖徳太子二才像、如意輪観音宝冠の破損、春日大社だ太鼓の破損、法隆寺や春日大社の石灯篭の転落、転倒などの被害があった。

地震から１日を経て、神戸旧居留地15番館の全壊が報じられて後、激震地の文化財の被害が徐々に明らかになっていったが、その実態把握や救援は遅々として進まなかった。そんな中で特筆すべきは、震災翌日の18日に早くもアメリカのポール・ゲティ美術館から支援の申し入れがあり、２月４日に２名が来日、６日から全国美術館会議・文化庁・国立美術館との合同で西宮と神戸で美術品の被害調査と応急処置を行ったこと、１月31日に民間ボランティアのＮＧＯ文化情報部が図書や歴史資料などの救助を開始したこと、神戸大学史学会・歴史学研究会などが構成する歴史資料保全情報ネットワークが２月１日に史料救出活動を始めたことなど、民間の研究組織や個人が救援活動にいち早く立ち上がったことである。特に、大学生など若者の参加が目立ち、文化財救援に一筋の光を見る思いであった。ちなみに、文化庁が関係学会と結成した文化財等救援委員会の活動はやや遅れて、２月19日に始まった。救援した文化財の修理は今も続けられる一方、すでに失われた文化財の数は、５年後の今も確定できない。

阪神・淡路大震災によって多くの人命・財産を失った私達は、地震の被害を最小限に止める備えと被災者の迅速な救援が、とりわけ大切であることを学んだ。同様に、多くの文化財の犠牲から、日頃の防災を怠らず、いざ大地震が発生した時、素早く救出し、修復し、後世に伝えることの必要性を学んだ。

阪神・淡路大震災は、文化財の大切なことの再認識を迫り、文化財保存を文化庁や教育委員会等の行政機関の責任に任せるだけではなく、私達市民自らも保存の担い手であることを確認させるものでもあった。

3　1997年９月イタリア中部地震の文化財被害と救援

1997年９月26日、イタリア中部のウンブリア州とマルケ州の州境のアペニン山中で大規模地震が発生し、文化財に大きな被害を与えたのは記憶に新しい。特に衝撃的だったのはアッシジ

のサン・フランチェスコ大聖堂の被災であった。現地時間深夜2時33分の地震による被害を調査していた人々に、午前11時40分のマグニチュード5.8、震度7の地震（日本の震度で5～6）が襲い、石造の大聖堂の天井が崩れ落ちる恐ろしい情景であった。2人の修道士と2人の建築修復技師が、落下する石材に打たれる瞬間を写した情景は日本のテレビニュースでも放映され、地震の恐ろしさを改めて印象ずけた。

その後も、アッシジの東20km付近を震源とする余震は続き、2ヵ月後の11月17日までにマグニチュード5.0以上が2回、4.0～4.9が21回、3.0～3.9が307回、2.9以下の地震は数千回に及んだ。

アッシジの属するウンブリア州はイタリア半島のほぼ中央にあって、北にフィレンツェを州都とするトスカーナ州、南に首都ローマを擁するラツィオ州に接し、ウンブリアの丘には、湖と森とオリーブと糸杉の悠々たる景色が広がり、イタリアの緑の心臓ともいわれる自然環境に恵まれた地域である。古代ローマ時代を起源とする中世都市の姿そのままのペルージアやアッシジ、フォリーニョなどの町々が点在している。今回の地震はこれらの歴史的な町々に大きな打撃を与え、今もその傷は癒えないままである。

地震直後から、消防・警察・軍・学生ボランティア等が救援活動を行っているが、政府の活動は必ずしも迅速に進んでいないようで、週刊誌"Primo Piano"の1997年10月30日号は「被災住民は救済されているか」との記事を掲載している。

そうしたなかで特筆すべきは、サン・フランチェスコ大聖堂の崩落した天井画の救援活動である。地震数日後には、警察、文化財関係者、宗教組織のほか全土から多くのボランティアが駆けつけ、救援を始めた。これより30年前の1966年11月、花の都フィレンツェはアルノ川の氾濫による未曾有の大洪水に襲われ、ルネッサンスの輝かしい文化財は6メートルもの水中に没した。この時、多くの国民と国際的支援のもとに行われた救援と修復は、数えきれない多くの教訓と修復技術や学術的成果をもたらした。アッシジの文化財の素早い救援活動は、こうした経験と文化財保存は市民が担うものとの自覚に支えられているのである。

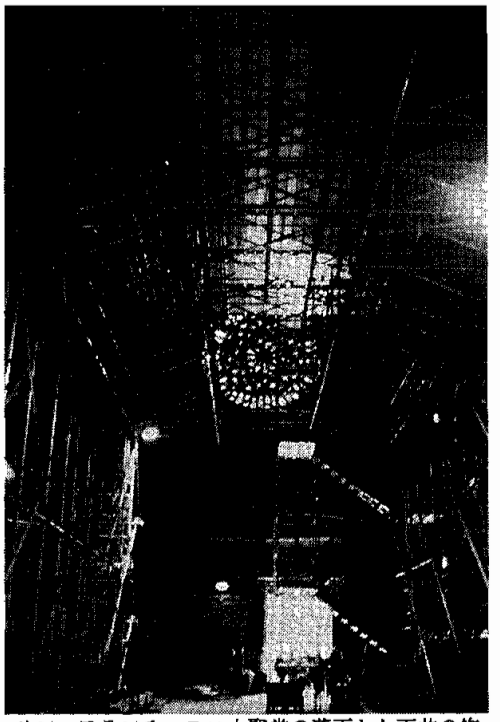
4　1994年1月アメリカ・ノースリッジ地震と文化財の救援

阪神・淡路大震災からちょうど1年前の1994年1月17日午前4時31分、アメリカ合衆国ロサンゼルス市をマグニチュード6.8の直下型地震が襲った。震源地の名をとってノースリッジ地震と名づけられたこの地震は市の殆どの建物に被害を及ぼし、倒壊したアパートや二層構造の高速道路の上層が落下して下層を走行中の自動車が押しつぶされるなど、死者61名の大きな被害をもたらした。被害調査に赴いた日本の役所や建築関係者をして「わが国では高速道路が落下したり、倒壊することなど起こりえない」と言わしめたことは記憶に新しい。

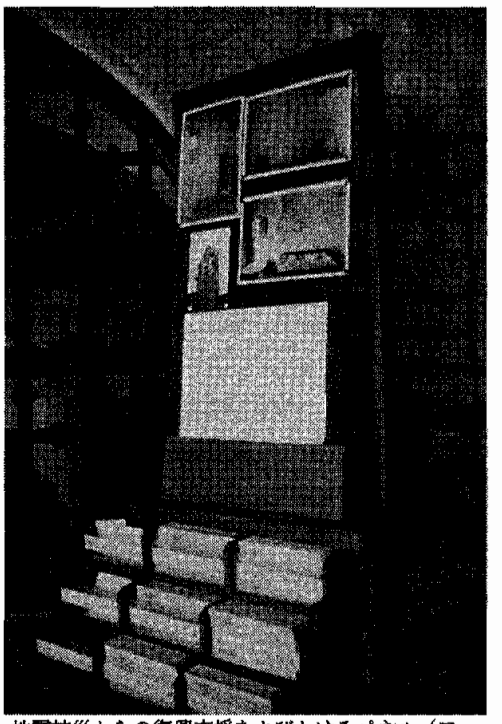
ロサンゼルス市の文化事業課によると、芸術品や歴史的建造物の被害総額は1億700万ドルと見積もられ、歴史的建造物3000棟余に被害が及び、内20棟が取り壊されたという。

日本建築学会近畿支部歴史意匠系4部会の阪神・淡路大震災による歴史的建造物の被害調査

1997年イタリア・ウンブリアーマルケ地震により落下したサン・フランチェスコ大聖堂天井壁画の修復（アッシジ）



サン・フランチェスコ大聖堂の落下した天井の修復（アッシジ）



地震被災からの復興支援をよびかけるパネル（アッシジ・サン、ダミアーノ教会）

によると、調査対象の歴史的建造物1260棟の内508棟（40%）が全壊・半壊・部分破壊、そして、傾斜・軽微を含めると被害は75%に及び、そして、既に取り壊された建造物は数百棟に及ぶと推定している。阪神・淡路大震災とノースリッジ地震、ほぼ同じ規模の地震の被害とその後の処置に余りにも大きな違いのあることに愕然とせざるをえない。

足立裕司神戸大学助教授は指摘する。日本の文化財保護は、1897年に古社寺保存法が成立して以来現在の文化財保護法に至るまで、国の行政主導のもとに行われてきたのに対して、アメリカの文化財保護は市民のナショナルトラスト運動に始まり、古物法（1906年）や史跡保護法（1935年）から現行の歴史的建造物法にいたるまで、市民活動によって支えられている。その違いが、ノースリッジ地震での素早い、市民組織の被害調査と保存活動、行政への働きかけ、修復処置となって現れているという。先の阪神・淡路大震災の際、文化財の被害の一端すら把握できずにいた震災翌日に、いち早くアメリカの民間美術館から支援の申出のあったことも頷ける。

1998年6月1日から7日まで、アメリカ・バージニア州アーリントンで、第26回アメリカ文化財保存科学会が『災害への備えと対策そして復旧』をメインテーマに開催された。地震などの自然災害あるいは戦争などの人災に備えて、文化財被害をいかに最小限にくい止めるか、災害の発生時にいかにして救援するか、文化財の価値を保ちつついかに復旧するかについて、28件の口頭発表と日本からの1件を含む32件のポスター発表があった。

阪神・淡路大震災の総括はすでに終えたとして、記憶の彼方に押しやっている多くの日本の文化財関係者とは極めて対照的である。

5　奈良における文化財の地震被害、そして、これからの備え

『日本書紀』によると599年（推古7）に大和で大地震があり、多くの家屋が倒壊したという。この地震の規模は推定マグニチュード7。以来、地震は正史や日記、地方文書等に記録されている。

奈良の文化財の地震被害記録の幾つかを抜粋すると、1096年12月（永長1）のマグニチュード8～8.5の地震では東大寺釣鐘が落下、薬師寺回廊の倒壊、1494年6月（明応3）のマグニチュード6の地震では東大寺・興福寺・薬師寺・西大寺等の破損、1596年9月（慶長1）の慶長伏見地震のマグニチュード7以上の地震では、唐招提寺戒壇と僧堂の倒壊、金堂・講堂・東塔の破損、法華寺・海龍王寺の大破、般若寺十三重石塔の相輪と上層の落下、1819年8月（文政2）のマグニチュード7以上の地震では春日大社石灯篭の8割の転倒、1854年7月（嘉永7）のマグニチュード7以上の伊賀上野地震では寺社の石灯篭すべての転倒、1936年2月（昭和11）のマグニチュード6.4の河内大和地震では法隆寺などの土塀の破損、1946年7月（昭和21）のマグニチュード8の南海地震では春日大社石灯篭300基の転倒、1952年7月（昭和27）のマグニチュード6.8の吉野地震の春日大社灯篭650基転倒、そして、1995年1月の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の璉城寺阿弥陀如来像や法隆寺聖徳太子二才像の破損などがある。

これらの記録から、奈良では、震度４で社寺の神仏像や博物館の土器等の転倒、震度５で石灯篭や土塀の転倒、震度６で寺社建造物の倒壊と被害が拡大し、阪神・淡路大震災級の震度７では大半の文化財に倒壊被害がでるものと推測される。さらに、文化財に被害をもたらす震度４以上の地震は、1300年の間に、およそ40回、30年に１度の割合で起こることが判る。

およそ200年に一度発生する紀伊半島沖の南海大地震、４～500年に一度の活断層による直下型地震などと考えていると、余程の不運でない限り一生このような地震に遭遇しないと錯覚しがちであるが、奈良坂・富雄川・葛城・中央構造線等30にも及ぶ活断層が複雑に入り組む奈良では、さらに近畿地方全体では数百箇所に達する活断層があり、余程幸運な人でも一生に３度くらいは震度５以上の大地震の恐怖に耐えねばならないことになる。

奈良の文化財の宿命である地震被害、これを最小限にくい止め、文化財を後世に伝えるには、どのようすればよいのか。それは、国宝や重要文化財のみならず、身近にあり、市井に埋もれている多くの貴重な文化財を調査・登録し、地震に備えて補強・強化し、地震が発生した時の迅速な被害調査と的確な救出の方法・体制を確立し、救出した文化財の価値を失することのない修理方法と理念を考え、必要な資金を確保しておくことである。